

ゲーテにおける「自己活動」について

教育学科 林 昭道

I はじめに

近代の教育思想が、「自己活動」 *Selbsttätigkeit* の中に教育の中心的価値を見出して以来、教育論の基礎をなすべき、トータルな発達論を構想するに際して、次のようなアポリアが意識されるようになる。即ち、個々の子どものもつ「自己活動」を通しての発達が、いかにして普遍性をもつ内容ないし方向性を獲得しうるかという問題つまり、個と普遍の統一の問題である。

ここでは、この問題を意識しつつ、J. W. ゲーテの“メタモルフォーゼ” *Metamorphose* の中に、トータルな発達論を考える上での大切な示唆をよみとろうとしている。ここでの発達論のアポリアは、より広い文脈でいえば、精神の自由がいかなる形式原理をまとうかという『自由と形式』の問題、E. カッシーラーがドイツ精神史の全体を流れる問題としたものを背景にしている¹⁾ といってよい。そして、カッシーラーがこの著作の中でカントと並んでゲーテに中心的な位置を与えていることを本稿でのゲーテへの視点が、一定の妥当性をもつことの1つの根拠とすることは許されよう。

更により直接的に、ゲーテ自身の教育思想の展開の軸自体の1つが、この個と普遍の関係づけにあったことが、彼の主著の1つ『ウィルヘルム・マイスター』に即して確認することができる。即ち、『徒弟時代』(1796)の教育理想は、主人公ウィルヘルムの個人主義的な自己形成という形で示される²⁾。ウィルヘルムが迷いながら自らの使命を探る「自発的な」形成過程は、いわば「見えざる手」に導かれて価値あるものに到達する、『徒弟時代』の終結部でウィルヘルムの恋人の弟が言う。「君はどうもキシの

子サウルみたいな気がする。親爺のロバを探しに行って王国を目つけたんだ」⁸⁾。ここには、個の自由な発達がおのずから普遍的な価値に達するという、レッセフェールの予定調和思想の反映がみられる。

これに対して、『遍歴時代』(1829)に出てくる教育ユートピア「教育州」を支配する主導理念は、「ジェスイット派的・軍国主義的精神」(Th.マン)とされ、個人主義的・自由主義的な色彩はほとんど残っていない⁴⁾。更に、個人の多面的教養という新人文主義的な教育理想は捨てられ、一面性の時代が宣言される。

「君自身を1つの器官としたまえ。そうすれば人類が好意をもって、一般生活のなかで君にある地位をみとめてくれるだろうことを期待してよろしい」⁹⁾。

ここでも個人の活動は、徹底的に個的・特殊であるのをやめはしないが、それが意義をもつのは「人類の器官」となるとき、つまり始めから自らの中に普遍との関係を含むときなのである。

以上をふまえて、ゲーテの「メタモルフォーゼ」の中に発達論の示唆を読みとろうとするとき、さしあたり次の3点の留意がなされねばならない。

1. メタモルフォーゼはさしあたり自然の有機体の変形(成長、「進化」)についての学問的主張である。

例えば、『植物のメタモルフォーゼ』についてゲーテは次のように述べる。「私は植物学に経験的な道を通して入っていった。いまでもよく覚えているが、性の形成についての学説があまりにもくどすぎるので、とうていそれを理解する気が起らなかった。このことが刺戟になって、私は独自の方法で事実を追求し、あらゆる植物に例外なく共通しているものを見つけだそうとするようになり、こうして私はメタモルフォーゼの法則を発見したのだよ」⁶⁾。

だとすると、人間の形成・発達の法則を節や脊椎の形成の図式に還元するのは極めて危険な試みとなろう。クルチウスが指摘するように、「自然の概念を精神の概念に転化させることは、ゲーテの場合には、常に類似関

係の意味しかもっていない。それは特にメタモルフォーゼと有機的形成にもあてはまる」からである⁷⁾。人間の発達と有機体のそれとの関係づけという大きな問題が、ゲーテに即してまず探究されねばならない。

2. 晩年のゲーテは、『植物のメタモルフォーゼ』をただシンボリックに解するように勧めている。「メタモルフォーゼという基本的な準則をあまりに広く説明しようとしてはなりません。それが理念と同じく豊かで生産的であると言ってくれるなら、それに越したことはありません。……生命はきわめて小さいネズミの中にも巨象の中にも等しく宿っています。そしていつも同じものです。また最小の苔でも最大のしゅろにおいても同じことです」⁸⁾

メタモルフォーゼはそれに付着していた特殊の内容を離れて、シンボルとしての意義をもつが故に、「(それは)存在し得るものであり、絵画や文学上の影像や仮象とは異なって、内的な真実性と必然性を持っているのである。同様の法則は、すべての他の生物にも当てはまるであろう」⁹⁾

かくて、本稿でのメタモルフォーゼへの関心からすれば、ゲーテにおける「シンボル」の意味が問われねばならなくなる。¹⁰⁾

3. メタモルフォーゼがこのように自然についての普遍的原理としての意義を得ることを通して、逆に、個別学的研究としての『植物のメタモルフォーゼ』にも新しい光があてられよう。それはもはや、単なる経験科学的研究たるにとどまることなく、同時に自然全体の原理を示すものとして意義づけられることになる。だとすると、『植物のメタモルフォーゼ』は今や1つの自然哲学と化し、それによって学的主張としての普遍妥当性を失うのだろうか。そうでないとしたら、ここにいかなる「科学性」ないし「認識としての妥当性」が考えられているのだろうか。これが最後に留意すべき点である。

やや先取的に言うと、メタモルフォーゼはたんに有機的自然の変形の現象をとらえた個別的理論なのではなく、普遍的自然認識の中に現われる自然そのものの姿（自然の本質的姿の開示）である。従って、本稿ではま

ずゲーテの自然観の発展の大枠をおさえつつ、メタモルフォーゼに与えられる意義を辿っていく。

II

デイルタイによれば、ゲーテの最も初期に属する自然観（1770年）の中には、アグリッパ(Agrippa von Nettesheim)、パラケルスス(Paracelsus)らルネサンス自然哲学への関心がみられるという。¹¹⁾ 宇宙全体を巨大な有機体として捉える「世界有機体」説、それを前提にした「大宇宙」・「小宇宙」の対応の思想の中では、人間は自然から切り離して考察されることはなく、逆に調和的に包みこまれる。ゲーテは、人間と自然の直接的調和というこの観方に共鳴しつつ、調和の根拠を対象としての世界の側にはなく、自らの心ないし感情という主体の側におく。

「まわりの美しい谷間から霧が立ちのぼり、昼間も暗いぼくの森の上に高々と太陽がかかって、ただ幾筋かの光線が神聖な森の暗がりかいにそっと差しこむ。そんなとき、ぼくは流れ下る小川のほとりの深い草の中かいにからだを横たえ、大地に身をすり寄せて数限りないいろいろの草に目をとめる。草の茎の間の小世界のうごめき、小虫、羽虫のきわめがたい無数の姿を自分の胸近くに感ずる。自分の姿に似せてぼくらをつくった全能者の現存、ぼくらの永遠の歓喜のうちにやさしくささえ保っていてくれる万物の父のいぶきかいを感ずる」。¹²⁾

感情的一体感の中で捉えられた自然は限りなく美しいが、知的認識にはなじまない。

「なんという眺めだ。しかし残念なことに絶景というにとどまる。どこを捉えたらいいのだ、無辺の自然よ」。¹³⁾

そして認識の中に根をもたない自然感かいは、主体の感情の動揺に対応して容易に揺れうごく。

「ぼくの魂の前に引かれていた幕は落ちてしまった。無限なる生の舞台

は、ぼくの眼前で、永遠に口を開いている墓穴の深淵に変わってしまった。……自然万物の中に隠れている浸蝕力、自分の隣人や自分自身をさえ破壊しないような何物をもつくることのなかった浸蝕力、こいつがぼくの心を掘りくつがえす。こう考えると、ぼくの足は不安のあまりよろめいてしまう」。¹⁴⁾

イタリア旅行を契機にして、ゲーテの自然観は180度転換するようにみえる。

「古代の美術家たちが、ホメロスと同じ程度に、自然に対して偉大な知識を有し、かつ何が描かれねばならぬものかに関して確たる概念を有していたことだけは確かである。……これらの高貴な美術品は同時に最も高い自然の業として、真実にして自然な法則に従いながら人間の手で創造されたものである。一切の恣意的なもの、虚妄なものは崩壊する。そこには必然性があり、神がある」。¹⁵⁾

ここでは自然は、主観の動揺を離れて客観的に、必然的法則に従って存しているようにみえる。ゲーテの学的自然認識は、かかる自然観に対応する。より正確には、ゲーテの自然研究の開始はイタリア旅行に先行しており、彼はメタモルフォーゼ理論への確信をイタリアにおいて見出すのである。後になってゲーテは、イタリアで得た思想について次のように述べる。

「我等をとりかこむ植物形体は、根源的に確乎不動なものではない。執拗に種属的自性を保持せんとするような頑固な所があるにも拘らず、むしろ適当な変幻自在性と円転滑脱性が植物形体に附与されており、かくして地球上到る所において、自体に影響を与える多くの諸条件に適合し、これに従って自らの形体を形成し、又変成し得んとするのである」。¹⁶⁾

植物は、無制限に変転しつつも植物自体の領域を固守し、鉱石や動物から区別される。従って、植物でありさえすれば、どんなにかけはなれたものでも同一の概念のもとに統括されうる。かかる概念を前提にして、ゲーテは、すべての植物部分の根源的同一性を自らの中に具象化した“原形植物”Urpfranzeの思想をもつ。イタリアでのゲーテは、この植物の实在を

信じていたようにみえる。

「こんなにさまざまな新しい、また新しくされた姿を眼のあたりにみると、この群のなかに原形植物を発見できるのではないかという例の出来心が、またしても私の心に起ってくるのだ。どうしてもそんな植物があるはずだ。もしも植物が、みな1つの規準に従って形成されているのでないとするなら、あれやこれやの形像が同じ植物というものであることを、私はいかなる根拠から認識することができようか」。¹⁷⁾

実在する個物としての原形植物は、それ自体において、植物の本質的な形態そのものである。こうして、個と普遍の統一の契機は、初期の自然観にみられたように主体の感情の中に求められるのではなく、客体の中におかれるようにみえる。

一年生の植物を対象にした『植物のメタモルフォーゼ』Die Metamorphose der Pflanzen (1790) では、植物の成長・生殖のプロセスは、「ある同一器官」の変形として描かれる。即ち、種子から始まって莖葉・萼・花卉・性的部分・果実の形成を経て、再び種子に至る過程でのすべての形態は、「葉」から導き出される。このいみで「葉」は、すべての植物部分の原型であるといってよい。しかし、この原型としての「葉」は、既に現実の可視的な葉と同一ではない。それは、「化生して色々様々の形態をとって現われる、この器官を暗示する一般的な言葉」にすぎず、「この器官の現象せる全てのもの」を比較する基準である。原型としての「葉」自体は現象とはならず、従って不可視である。

原型を不可視・超感覚的な理念とする考えは、すでに『イタリア紀行』の中にも表われている。

「原形植物は世にも不思議な植物で、それを発見した私は、自然によって羨まれても然るべきである。この典型と鍵とによってわれわれは植物を無限に発見できるし、それらの植物は首尾一貫したものでなくてはならぬ。すなわちたといそんな植物が存在しないにしても、存在し得るものであり、絵画や文字の影像や仮象とは異なって、内的な真実性と必然性を持って

いるのである」。¹⁸⁾

原型植物が実在するか否かは、もはや主要な問題ではない。それは、あらゆる植物の形成の条件・基準として働く理念である。原型植物が理念であるということは、シラー (F. Schiller) との対話 (1794年) を通して更に深くゲーテに自覚された。理念たる原型植物は、経験の中にそのまま見出されはしない。こうした理念と経験のズレの自覚から、ゲーテの新たな自然観・メタモルフォーゼ観が生じてくるのである。

III

ゲーテは、自分とシラーとの違いについて次のように述べる。

「詩人が普遍に対して特殊を求めるか、それとも特殊の中に普遍を見るかということは大きな違いである。前者からはアレゴリーが生ずるが、ここでは特殊は普遍の例としか考えられていない。しかし後者は、もともと詩の本性である。それは普遍を考えたり、それを暗示することなしに、ある特殊を表わす。さてこの特殊を生々とした姿でとらえる人は、同時にそれと知らずに普遍をいっしょにとらえるか、後になって初めてとらえるかである」。¹⁹⁾ シラーが原型植物の理念を1つのアレゴリーとみたにすぎないのに対し、ゲーテにとってそれは特殊でありつつ普遍をさし示すシンボルであった。

ゲーテは、このシンボリック的認識をたんに「詩の本性」たるにとどめておかず、それを方法的に整備することを通して、学的認識にも適用せんとする。ゲーテは比較解剖学における骨学的原型の設定に際して次のように述べる。

「誰しもモグラの上腕骨とウサギのそれは類似の有機体の同一部分と思われまいだろう」。²⁰⁾ しかし、「発生的処置」²¹⁾ をとることにより、即ち同時性においてでなく継起性の中で捉えることにより、両者の比較は可能となる。「人は各々の骨の研究にあたって、その示す幾多の異例をある直観

的順序で提示するだろう。その方法として各々の骨をそれぞれの事情の特殊性に応じて最も都合よく明瞭にするために、或は簡単なものから複雑なるものや発達せるものへ、或はその方向に1つの系列を表示することになる」(傍点一引用者)。²²⁾

こうして、発生的処置は個物の認識の明確化の方法である。従って、「もし私が生起せる事物を眼のあたりにして、その起源を尋ね、かくして追求し得る限りその発展過程をその根源へと遡るならば、私は1系列の発展段階を発見する」²³⁾と言われるとしても、ゲーテにおける「発生」は生命現象の歴史的順序を示すものでなく、やはり理念的なものである。「これらの発展段階は一瞬の間に並列的に見る事は出来ぬが、私の記憶の中にこれらを再現して、ある観念的全体を構成せねばならぬ」²⁴⁾。

個の中に普遍全体を見るシンボルの認識とは、この「観念的全体」の中に個を位置づけること、もっと言えば、個の中に発生的法則自体を捉えることに他ならない。ところで、発生的法則自体が実在せぬ1つの理念である以上、それを自然認識に適用しうるためには自然自体がこの法則に従うという公準が必要となる。ゲーテは、ライプニッツ (G. W. Leibnitz) の連続律を想起させる仕方で、「自然は絶対に飛躍しない」²⁵⁾と述べる。自然の連続的变化・メタモルフォーゼは、1つの公準=「根源現象」である。それは探究の前提であって、それ自体に対する探究を拒ける。

「根源現象に出会って驚いたら、そのことに満足すべきだね。それ以上高望みをして人間に叶えられることではないから、それより奥深く探究してみたところで、なんにもならない。そこに限界があるのさ」²⁶⁾。

「最高のことは、あらゆる事実的なものはすでに理論なのだ、ということを理解することであろう。空の青色は、われわれに色彩論の根本法則を明示する。現象の背後に何ものをも求めるな。理論なのである」²⁷⁾。

現象は個々バラバラにでなく、その発生的連関においてうけとられる限りにおいて、それ自体理論である。こうして今や、「原型」という語につきまわっていたスタティックなイメージはぬぐいさらねばならない。普

遍的なものは、ある孤立した理念ではなく、個物の間に存する発生的法則だからである。

ある1つの「含蓄あるケース」に注目して、そこに普遍的法則を見出す仕方は、実は、既に『植物のメタモルフォーゼ』の中に見られる。ゲーテは、第2次ローマ滞在に際して、「ドイツの風土の中には容易に出現せざる若干の蓄生せる植物」の観察と写生を通してメタモルフォーゼ説をはっきりと捉えたのだが²⁸⁾、この正規のメタモルフォーゼ法則に従わない蓄生の植物について、彼は次のように説明している。蓄性せるバラやなでしこにおいては、花はいわば未完成にすぎず、この花の真中から再び茎が伸び或は花を咲かせる。そして、この変則的なメタモルフォーゼにおいてこそ、「自然は普通、花に於てその成長を終えて清算する」ことが証明される、と²⁹⁾。

ゲーテのシンボリック認識における個と普遍の関係づけは、まずは、ベーコン的帰納法におけるそれと鋭く対立する。後者にあつては、いくら普遍的認識に迫ろうとしても、結局得られるのは特殊の寄せ集めにすぎない。「ベーコンにあつては、個々の事例にあまりに多くの権利が帰せられすぎている」³⁰⁾。

色彩論におけるニュートンとの激烈な対立にも拘らず、ゲーテはむしろ、数学的物理学における個と普遍の関係づけに親しさを感じる。例えば、ガリレイは「揺れ動く教会のランプから振子と物体落下の法則とを展開することによって、天才にとっては、1つの例が1000の例にもあてはまるということを証明したからである」³¹⁾。

数学的物理学も、シンボリック認識の一形式としての妥当性をもつ。ゲーテがそれを拒けるのは、結局のところ、そのみが唯一の妥当な説明形式として絶対性を主張する場合なのである。

「私は数学は適切な場合に利用される限りにおいては、もっとも高級な、もっとも有益な学問として尊敬している。しかし、およそ当該領域でもないことで、この高尚な学問をたちまち無意味さが露呈してしまうようなこ

とにまで誤用しようとするのは感心できないよ。おまけに数学的に証明されなければ、一切のものも存在しないみたいな調子だからな」³²⁾。

ここでは数学的物理学におけるシンボリック認識形式を、細かく論ずることはできない。ただ、ゲーテが「連続性の公準」と「個を発生的連関におくことにより普遍に結びつける方法」とを、数学的物理学と共有していたことを指摘しておく。数学的物理学は現象を完全に計算可能なものとして捉えることをめざし、ゲーテは現象を完全に「可視化」することをめざす。数学的物理学は現象の総体を数学的に同質的な要素間の関係に解消し、それによってあらゆる特殊的规定を脱することにより自らの普遍妥当性を確保した。これに対してゲーテは、あくまでも個を「生き生きと」、その特殊的规定を伴ったままで捉えんとする。

「多少とも自然を生き生きと直観しようとするれば、我々自身がこの自然の示す例そのままに運動を行ない、しなやかな受容力を保つ状態にいななければならない」³³⁾。

ゲーテによれば、実験をいわば人間から切り離れたところに、現代物理学の最大の不幸がある。そうでなくて、「人間自体が、健全な知力を使っている限りにおいては、ありうるかぎりの最も偉大で最も精密な物理器械である」³⁴⁾。人は自然の本質について語る時、常に同時に自らの本質について語らざるをえない。純粋な人間の感覚の完全があってはじめて世界の意味を捉えうる。ファウストが『森林と洞窟』Wald und Höhle の章で「自然の深い胸の底を」友人の胸のうちを見るようにみたと言うとき、彼は自らに似た霊を理解していたのである。こうしてゲーテは、主体・客体の二元的分離を前提とする数学的物理学の自然認識に決定的に対立する。

しかし、自然認識が主観から切りはなし得ないとしたら、認識内容の真理性の基準はどこにおかれるか。

「真なるものは促進する。しかし、誤りからは何ものも発展しない」³⁵⁾。この命題は、再びライブニッツを想起させる。ライブニッツは、諸々の自然認識の真理性の基準を「完全性」という概念で表わした。彼によれば、

自然認識は全て仮説であるが、そのうち、最も少ない仮定から最も豊かな帰結をうむものが、最も完全性の高い仮説、即真理であるとされる。ライプニッツのこの規定には、論理主義的な色彩が濃い。ゲーテは、真理の仮説的性格規定、及び学的真理の基準としての「多産性」という規定をライプニッツを共有しつつも、「多産性」の意味を更に拡大して、仮説の真理性の基準を「行為」の領域にうつしかえたといつてよいだろう。

ゲーテのメタモルフォーゼは、

1. 有機体の発達論と人間のそれとのシンボリック関係に着目し、
2. 数学的物理学とは異って、個と普遍の生々とした統一の認識には主観の関与が不可欠であることを示し、
3. 自らをシンボリック認識の一形式として、他の諸形式と並べて「行為」という審判の前に相対化した。

我々はこれらの主張の中に、発達論の構築の直接の基礎というよりも、さしあたり、それへの生産的な批判をみてとることができるように思われる。

注

- 1) Ernst Cassirer : Freiheit und Form, Studien zur deutschen Geistesgeschichte, 1916. 中埜肇訳『自由と形式』1972年を参照。
- 2) J. W. Goethe : Wilhelm Meisters Lehrjahre. 小宮豊隆訳『ヴィルヘルム・マイステルの徒弟時代』を参照。
- 3) 同上, 訳書(下) 298頁。
- 4) トーマス・マン『ゲーテ論集』山崎・高橋訳, 1971年, 「ゲーテとトルストイ」を参照。
- 5) J. W. Goethe ; Wilhelm Meisters Wanderjahre, 関泰裕訳『ヴィルヘルム・マイステルの遍歴時代』(上)を参照。
- 6) J. P. Eckermann : Gespräche mit Goethe in den Letzten Jahren seines Lebens, I 山下肇訳『ゲーテとの対話』(上), 302頁。
- 7) E. R. Curtius : Kritische Essays zur Europäischen Literatur. 松浦他訳『ヨーロッパ文学批評』, 1969年, 34頁。
- 8) ゲーテ, フォン・ミュラー書記官長に, 1830年。前掲カッシーラー『自由と形

式より再引。

- 9) Goethe ; Italienische Reise. 相良守峯訳『イタリア紀行』(中), 186~7頁。
- 10) たとえば, Eichhorn, P ; Idea und Erfahrung im später Goetes, 1971を参照。
- 11) W. Dilthey : Weltanschauung und Analyse des Menschen seit Renaissance und Reformation, Wilhelm Dilthey Gesammelte Schriften 11, S. 394~7.
- 12) Goethe : Die Leiden des jungen Werthers. 高橋義孝訳『若きウェルテルの悩み』, 8頁。
- 13) Goethe : Urfaust, dtv Gesamt ausgabe 8, s. 145.
- 14) Goethe : Die Leiden des jungen Werthers. 前掲高橋訳74頁。
- 15) Goethe : Italienische Reise, 前掲相良訳参照。
- 16) ゲーテ『著者は自らの植物研究の歴史を伝ふ』村岡一郎訳 207頁。
- 17) Goethe : Italienische Reise. 相良訳(中)116頁。
- 18) Goethe ; Italienische Reise. 相良訳(中)186頁。
- 19) Goethe ; Werke (Hamburger Ausgabe, herg. v. Erich Trunz), 12. S. 471. なお Eichhorn, Idee und Erfahrung im später Goethes, S. 139参照。
- 20) ゲーテ,『骨学に出発する,比較解剖学総序論の第一草案』菊池栄一訳, 376頁。
- 21) ゲーテ『植物生理学の予備的研究』村岡一郎訳, 273頁以下参照。
- 22) 前掲ゲーテ『第一草案』, 378頁。
- 23) 前掲ゲーテ『植物生理学の予備的研究』274頁。
- 24) 同上274頁。
- 25) 同上274頁。
- 26) Eckermann ; Gespräche mit Goethe, 山下肇訳『ゲーテとの対話』(中)69頁。
- 27) Goethe ; Wilhelm Meisters Wanderjahre, 関訳『ウイルヘルムマイステルの遍歴時代』(中), 262頁。
- 28) ゲーテ『植物変化に関する論文の由来』村岡一郎訳, 229頁。
- 29) ゲーテ『植物のメタモルフォーゼ』村岡一郎訳142頁。
- 30) Cassirer., Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und Wissenschaft der neuen Zeit. IV. s. 153.
- 31) 前掲カッシーラー『自由と形式』198頁。
- 32) 前掲『ゲーテとの対話』(上)242頁。
- 33) ゲーテ『形態学序説』
- 34) ゲーテ『箴言と省察』
- 35) 前掲『遍歴時代』(中)268頁。

A study of human spontaneity in Goethe

Akimichi Hayashi

An important task for education is to respect the spontaneity (Selbsttätigkeit) of the child as well as to lead his (her) activity to general validity.

In this essay, I will make this point by considering J. W. Goethe's thought about nature, with emphasis on his theory of metamorphosis ("Metamorphose").

Since "Metamorphose" is a theory concerning the development of organism, it is not directly related to human beings. When symbolically understood, however, Goethe's theory of "Metamorphose" has some universal value.

If "Metamorphose" is related to the science, in what way is it scientific? Taking these problems into consideration, we shall follow the transformation of his views on nature.

At first, Goethe could not catch nature as an objective entity, but rather through his emotion. (cf. "Die Leiden des jungen Werthers" 1774).

His first travel to Italy had an effect of enabling to grasp nature as an objective fact. At this stage, the split of nature and Goethe himself occurred and his views on nature were firmly established.

His argument with Schiller on this assertion made Goethe less certain about his belief. Now he regarded 'Urpflanze', not as an allegory, but as a symbol.

Among individuals things caught as symbols, there does not exist at first any discernible identity. They emerge in a series, which serve to express themselves most properly in accordance with special circumstances. "Metamorphose" thus signifies a form or method, and not a fixed thing itself. The recognition caught by

“Metamorphose” denies the inductive method of F. Bacon. The latter can catch only a mixture of examples, and does not lead us to universal validity. On the other hand, “Metamorphose” is different from the recognition of the mathematical sciences, which grasp individual things in their pure abstraction. In contrast, Goethe tries to see things concretely. For Goethe, truth is not fixed, but dynamic and hypothetical.

The test of a hypothesis is the action. Similarly, the test of an understanding is the degree of its productivity.